

## 水道の内因性疾患

水道水中の有害物を検討してつくづく思うのは、水道自身に加えているものの毒性が、外部から水道に入ってくる毒性よりはるかに高いということである。水道関係者は、しばしば水道水に入ってくる農薬を問題にする。農薬が環境に与えている影響は計り知れないが、水道水から入ってくる農薬の毒性の大きさは、どう見ても塩素処理によって生成される有機塩素化合物の危険性と比べてはるかに小さい。それに鉛。水道管に鉛管が使われ、さらに計器の接続部にも使われている。それらは、水道局が商品の指定をして使用を義務付けたとのことである。そして、今回のアルミ。浄水場で水をきれいにするために加えられる。いずれも、水道が積極的に自らの手で加えているものである。それらの危険性は、いま分かっているものだけでも、外から入るものより大きい。それにもかかわらず、水道側からは、農薬が問題、洗剤が問題、という声は声高に聞こえるけれども、塩素処理やアルミや鉛について、問題が提起されたことがない。

水道が抱える問題が、内因性だと私が言うのには二つの理由がある。第一の理由は、冒頭に書いたように、多くの有害物の起源が水道局などが行っている行為そのものにあること、第二の理由は、水道関係者のきわめて閉鎖的な社会の中で、常に手当が遅れることである。特に日本がひどい。

アルミとアルツハイマー病については、インタビューにあるように、その因果関係は今のところはっきりしない。しかも、浄水処理の過程で加えるアルミはすべて凝集するので、水道水中には含まれず、水道水中に存在するのは原水起源のものであるという報告もある（これも又、ただただ自己防衛のためだけの、内因性疾患の一つの表れでなければいいが）。したがって、本当のところは分からない。ただ言えることは、これほど長きにわたって問題になっているにもかかわらず、アルミの測定値を水道局がもっていないこと、あるいは、もっていないことになっていることである。そして、PAC（ポリ塩化アルミ）を加えて、凝集沈殿という現在の方法に代わる方法の研究が進んでいないことである。

今の段階でアルミが毒か否かの議論を戦わせても、多分、それほど実りあるものにはならないと思う。しかし、最低、次の三つのことをしよう。全国の水道水のアルミを測り、それがどういう分布になっているかを調べる。アルミの濃度が高い地区があれば、その原因の推定ができるようになるだろう。第二に、PACに代わる浄水処理の方法を研究し、部分的に使っていく。この際、厚生省は新しい方法の試みにブレーキをかけないこと。第三に、アルミをやめても別の物を使わざるを得ない、いずれにしろ危険性はあるから冷静に判断し、代替物の危険性も視野に入れて行動すること。

中西 準子